出会い

sibugaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
出会い

【Ｎコード】
Ｎ４２２８Ｑ

【作者名】
ｓｉｂｕｇａｋｉ

【あらすじ】
これは自分が書いてる小説「スーパーロボット大戦ＬＩＮＫ」で何時かやろうと思っているシーンを先に書いた短編です
ですので思いっきりネタバレですので続きを知りたくない人は見ないで下さい

（前書き）

ネタバレ注意です
スパロボＬＩＮＫのネタですので知りたくない人は戻って下さい
それでも良いという人だけ見て下さい

満点の星空が輝く
そう、此処は宇宙
Ｌ５宙域である
此処で、初めてそうじろうはかなたと出会った
と言ってもあの時のかなたは人間ではなかった
『ズフィルード』
人類がそう呼ぶ兵器
バルマー帝国が軍の最終兵器として投入したと資料には載っていた
だが実際は違っていた
ズフィルードは本来宇宙の中立を保つ為に大宇宙が作り出した生命体だったのだ
生命体のある星がある一定の文明に達した時、それが悪しき文明だった場合その文明を滅ぼし一から星を再生させるのを生業とする種族
それがズフィルードであった
そして、此処Ｌ５宙域で当時まだ仕官に成り立てであったそうじろうは生まれて初めてズフィルードと対峙した
当時の機体はゲシュペンスト１号機
対して前に居たのは紫の体を持つ人型の結晶体の怪物
その二体が宇宙で激しくぶつかりあっていた
そうじろうの居た艦隊は既に壊滅していた
今目の前に居るズフィルードが攻撃したからだ
その時、そうじろうはきっと辛い思いがあったのだろう
その中にはきっとそうじろうの家族に匹敵する仲間が居た筈だ
それを・・・滅ぼしてしまった
今思えば償いきれる罪ではない事は自分自身が分かっていた
だが、その時まだ自分は意識が無い状態であった
只頭の中に流れていく命令に従って行動をする

（文明を破壊せよ）

その一言であった
そして、その前には頭が命じる文明が居た
地球人
太陽系第三惑星『地球』に存在する種族である
だが、この種族は絶えずお互い争い会い、地球を汚している
間違いなく星に害を成す生命体である
其処で私が派遣された
この星の文明を破壊する為に
そして地球を前にして初めて会った地球人が・・・彼、そうじろう
の所属する艦隊であった
そして、今目の前で必死になって戦っているのがそうじろうであった
この時、階級は確か准尉、まだ１０代後半に入ったか入らないかど
うかと行った年齢である
そんな若い青年であるそうじろうが無謀にも自分に・・・ズフィル
ードに挑んでいたのだ
だが、不思議とその青年の操るゲシュペンストは善戦していた
嫌、恐らくこの時にズフィルードである自分に変化が現れたのかも
知れない
まだ知り合えなかった二人が互いに宇宙で激突する
お互いの拳が激しくぶつかり合う
漆黒の宇宙に激しい閃光と火花が舞い散る
その中で徐々に亀裂の入る音が響いた
それはそうじろうの乗っているゲシュペンストであった
彼の機体の腕が徐々にひび割れてきていたのだ
このまま行けばこの男は死ぬ
だが、それもまた使命の一つ
地球人は全て滅ぼさなければならない

そう命じられていた筈であった
だが、その時自分が行った行動は今でも覚えている
次の瞬間、砕けたのはズフィルードの体であった
そう、ズフィルードはわざと手の力を抜いたのだ
その為腕を皮切りにズフィルードはゲシュペンストの拳を受けて粉々に砕け散った
粉々になった結晶は漆黒の宇宙の中でキラキラ舞ってやがて見えなくなった
それを損傷したゲシュペンストが見ていた
その中ではそうじろうは肩で息をしていた

「か・・・勝った・・・・のか？」

若年であるそうじろうは未だ信じられないで居た
自分があんな化け物に勝てた事に
自分の所属していた艦隊をいとも容易く葬った怪物に自分が勝った
信じられない話であった
あの艦隊の中にはそれこそ自分の恩師に当たる人も居た
先輩も居たしとにかく自分より上の存在の者達ばかりであった
しかしそんな者達の乗った艦隊があの怪物に葬られたのだ
だが、それを自分が葬ったのだ
信じられなかった
だが、今一つ理解出来る事があった

「・・・結局、生き残ったのは俺だけか・・・」

シートにもたれかかってそうじろうはそう呟いた
それから暫くして別の艦隊がそうじろうのゲシュペンストを発見して回収した
そして、後にこの戦いは「Ｌ５宙域の戦い」と記されていた

其処での記録はこうである

連邦軍第１８艦隊
Ｌ５宙域にて謎の生命体と交戦
約一名の生存を確認
他は全て戦死したと確認
尚生存者の名前は

＊＊＊

「かったるいなぁ」

あの戦いから少し経った今、そうじろうは憂鬱な顔をしていた
何処か浮かない顔つきである
何か嫌な事でもあったのだろうか
嫌、それはこれから起こる事でもあるのだ

「泉少佐、いい加減にして下さい。脳研に行くのはもう決定事項なんですから」

そうじろうが乗っていた車の助手席に座った若い男性がそう言い聞かせた
銀髪でまだ若年ではあるが真っ直ぐな視線をしている

「んな事言ってもよぉゼンガー。俺あそこ行きたくねぇんだよ」
若い兵士「ゼンガー・ゾンボルト」に対しそうじろうは言った
「脳研に行くのは既に軍が決定した事なのですから今更文句を言っても仕方ないでしょうが！」
「んな事言ってもよぉ！あそこに居るのって言ったらお先真っ暗な顔ばっかした非検体の奴等に不健康そうな顔した科学者だらけだろう？あそこに行くと俺まで病気になっちまうよぉ」
「文句を言っても始まりませんよ少佐」

愚痴るそうじろうをゼンガーが手を引きながら連れて行く
そうじろうは終始嫌そうな顔をしていた
本当に嫌だったのだろう
そんなそうじろうを手引きしながらゼンガーは脳研内に入っていく
ゼンガーはまだ若輩ながらその示現流腕前はかなりの物であった
その為そうじろうが組織した部隊「特機隊」に所属出来る程の腕前を持っていたのだから
因みにそうじろうは過去のＬ５宙域の戦いの功績で少佐に昇進していた
しかし本人は余り嬉しくなかった
自分だけが生き残ったからだ
だが今はとやかくは言わない事にしておく
とにかく今は何処かで時間を潰す事だろう

「ほら、行きますよ少佐」
「へいへい」

ゼンガーの言葉にそうじろうは渋々頷きながら車を降りた

そしてそのまま通路を歩く
やはり通路の中にはそうじろうの言った通りお先真っ暗な非検体や
不健康そうな研究員ばかりである
それらが通り過ぎる度に嫌そうな顔をするそうじろうである
その度に溜息をつくそうじろうを見て呆れた顔になるゼンガー

「あ～あ、早く終らして今やってるギャルゲーをやりたいなぁ」
「少佐・・・そんなんですから今でも独身なんじゃないんですか？」
「お前には言われたくねぇよこの頑固野郎！」

ゼンガーに言われたのに鸚鵡返しのお要領でそうじろうは言う
そしてそのまま窓の外を見る
外には一面美しい花畑が咲き誇っていた。こんな殺風景な脳研にあ
んな美しい光景があるとは正直驚かされた
だが、そうじろうが驚いたのはその次であった。その花畑には一人
の女性が居たのだ。青い髪に緑の瞳をした幼い顔立ちの女性である
それを見たそうじろうの中で脈動が激しく動いた。気がつくと自分
の顔が赤くなってるのが気づく。隣でゼンガーが自分を呼んでるが
全く気にならない。と、言うか返答する気にもならない

「ゼンガー、俺少し用事を思い出したからお前先行っててくれ」
「え！ちょっと、少佐ぁ！何処行くんですかぁ！！！」

ゼンガーが吠えるもそんなのお構いなしにそうじろうは真っ直ぐ走
っていった。目的地は勿論あの花畑である。其処にはさきほどの女
性が空を見上げながら鼻歌を歌っていた。どんな唄かは知らなかっ
た。だが聞いてると何処か安らぎを覚える歌でもあった
やがて女性がそうじろうに気づき振り向く。緑の瞳がまるで宝石の
ように輝いている。今にも吸い込まれそうな程の輝きである

「あら、もしかして軍人さん？」
女性はそうじろうの今の服装を見てそう呟いた。そうじろうは自身の服装を見てハッとした。そうだ、今自分は軍服を身にまとっていたのだ。これでは返って怖がらせてしまうかもしれない。そう思ったがその思いは稀有であった
女性はそうじろうに向かって優しく微笑んだのだ

「そんなに慌ててどうしたの軍人さん？」
「え、あ、いやぁ、もしかしたらこの格好を見て怖がらせてしまったかな？って思ってね」

そうじろうはそう言って頭を掻き毟る
違うだろう！自身の頭の中にそう罵倒する。言いたいのはそうじゃないだろう。もっと率直に言えよ！そう言うも中々目の前に居ると言い辛い物がある
すると女性はそんなそうじろうの内面など気づいて居ないのか「大丈夫ですよ。別に軍人さんを怖がってませんから」と言ったのだ。それには内心ホッとするそうじろうである
流石に今の気持ちを気づかれるのは非常に恥ずかしい。言う前に気づかれるなどもっての他なのだから

「隣・・・良いかい？」

そうじろうは擦れる喉に必死に叱咤してやっと声を出した
それに女性は「どうぞ」と言ってすぐ隣を手で指す。それを見てそうじろうは隣に座る。床一面に敷かれた草花の感触がした

「良い天気ですね」
「そ・・・そうだねぇ」

女性が楽しそうに言うのをそうじろうは返す。実際天気など見てられない。そんな心境だったのだ。

「少佐ぁぁ！こんなとこに居たんですかぁ？脳研の人達カンカンですよぉ」

するとそんな良い雰囲気の二人を引き裂くかのようにゼンガーが走ってきた。ちぇ、結局いえなかったな。内心舌打ちしながらそうじろうは立ち上がる

「それじゃ、俺もう行かなきゃ」

「そうですね。それじゃまたね、軍人さん」

そう言って女性はそうじろうに向かって手を振る。そうじろうもまた手を振り返す。そして前を向いて歩き出す。そんなそうじろうをゼンガーは見ていた

「少佐、あの人は誰ですか？」

「お前には関係ない」

そう言ってそうじろうは歩き出す。ゼンガーは首を傾げていたが特に気にしなかった

そしてその後は脳研の人達との会話であった。流石はゼンガーと言うだけか彼一人でどんどん話を進めていく。その隣でそうじろうはと言うと先ほど出会った女性の事で頭が一杯であった。また会いたいなぁ。そう思っていたのだ

＊＊＊

それからと言う物、そうじろうは脳研に行くのが楽しみになった。と、言うより彼的に言えばあの女性に会うのが目的だったのだ。あの青い髪に緑の瞳をした女性に会うのが目的で此処に来たのだ
そして今回で実に五度目になる。また同じように女性と二人で花畑に座っていた

「よぉ、かなた。また来たよ」
「あ、そうくん」

二人はお互いに名前を呼び合った。そう、既に二人は自己紹介を終えていたのだ。その為今はこうして呼び合っている。そしてお互い柔らかく笑い会ってそして座った。側から見ると良い雰囲気であるよし、今日こそは言おう、そう内心決めていた。その為に今日は此処に来たのだから

「か・・・かなた」
「何？」

かなたは返事をしてそうじろうを見つめた。そうして見つめられるとさっきまで頭の中で浮んでいた言葉が引っ込んでしまうのが分かった。だが此処で言わなければきっと後悔する。それでも出ないのだ。それが溜まらなく辛い。額を汗が流れるのが感じ取れた
言いたい。でも言えない。そんな葛藤が今自分の中を駆け巡っていた。そんな時、彼女がそっと自分の手を掴んでこういう言ったのだ

「頑張って」

と、そう言われた時、ふっと自分を縛り付けていた何かが崩れ落ちるのを感じた。そして深く深呼吸をしてじっと彼女を見る

「かなた・・・俺と・・・俺と一緒に来てくれないか？」

言い方は屈折してるが立派なプロポーズであった。そう、今まで四度に渡り言おうとしたのだが中々言いだせずに今に至っていたのだもし断られたらどうしよう？そんな小さい恐怖があった為に言い出せなかったのだ。だが、言ってしまった以上は後は天に任せるしかない。そう思えた。そんな自分を彼女は微笑みながらこう言った

「はい、喜んで」

え？喜んで？つまりＯＫって事？一瞬そうじろうの頭の中の思考回路がパニックを起こした。思考処理能力が著しく低下している。先ほどの言葉の意味を理解するのにかなり時間が掛かった気がした。だが、理解した時彼の胸中には溢れんばかりの嬉しさがこみ上げていた。そして思わず

「よっしゃあああああああああ！」

思わず両手を振り上げて叫ぶ。その大声は大空に吸い込まれていったそれからは色々と面倒な手続きこそあったが晴れてかなたは脳研を出てそうじろうの元へ来た。その後かなたはそうじろうの住んでいた家で一緒に住む事になり其処で様々な話をした
しかし、何故自分があそこに居るかは話してくれなかった。その話をすると何時も答えは「覚えてない」の一点張りである。その為今

はそうじろうも聞く事は無かった
それから数年の後、二人の間に念願の子が生まれた。玉のような女の子であった。それを見てそうじろうは喜んだ。かなたも凄く嬉しそうであった

＊＊＊

そうじろうとかなたの子が生まれてから数日の後、そうじろうはある時かなたに呼ばれて夜の病院の庭に来ていた。其処には患者の服を着たかなたが立っていた

「どうしたんだ？こんな時間に」
「そうくん、Ｌ５宙域の出来事・・・覚えてる？」

かなたは聞いた。それを聞いた途端そうじろうは顔を暗くした。思い出したくない事であった。あの時出会った謎の生命体「ズフィルード」の為に部隊は全滅、生き残ったのは自分一人だと言うおぞましい事件であったのだ。だが、ふと疑問が浮んだ。何故彼女がその事件を知っているのか？あの事件は連邦軍上層部の手により完全にもみ消された事件である。一般人が知る筈が無いのだ

「どうしてそれを君が知ってるんだ？」

当然の如くそうじろうは聞いた。するとかなたは返した

「あの時の存在・・・そうくんの居た艦隊・・・それを壊したのが・・・私だから」
「な！！！」

それは正に衝撃の一言であった。それが指す意味はつまり、彼女が人間では無いと言う事なのだ。そして、今目の前に居るのがかつての仲間の仇でもある
もしあの時のままであればきっとその場で彼女の首を絞め殺していた筈だ。だが、今の彼には出来なかった。何故なら彼女を愛していたからだ

「教えてくれ、どうしてあの時俺を生かしたんだ？」
「私は最初心と言う物が無かった・・・でも、貴方と戦ったことにより私の中に心が芽生えた。それから私の中にこの思いが生まれたの。「もう一度貴方に会いたい」って」
「その為に君は脳研に居たのか」

そうじろうの問いにかなたは頷いた。遥か宇宙からこの地球までわざわざ自分に会いに来た。下手な恋愛小説の主人公になった気分であった。だが、そう言った直後、かなたは悲しそうな目をした

「どうしたんだ？そんな悲しい顔をして」
「そうくん・・・実は、私もう行かないといけないの」
「ど、どういう事だ？」
「ズフィルードは本来星を管理する為に宇宙が作り出した生命体。その為に星に住んでる文明が悪しき文明であればそれを滅ぼすのが私達の使命・・・」
「まさか・・・この地球も・・・」

そうじろうの言葉にかなたは頷いた。間も無くこの星にズフィルードがやってくる。今の地球の戦力ではまずあの化け物には勝てない。それは火を見るより明らかであった

そしてかなたはそうじろうの方をそっと見た

「私はこの星の人達が好き。皆とってもやさしかった。だから・・・私はこの星の人達を守ります」

そう言うと彼女の体は白く発光しだした。その光は人一人分の大きさにまでなると宙に舞い上がった

「かなた！待ってくれ！」

「そうくん、あの子の事・・・こなたにはこの事を内緒にしてね・・・でないとあの子はきっと追ってくる。私はあの子にはこんな宿命を背負わせたくないの」

「かなた・・・くっ！」

そうじろうは跳び上がって発光体を掴もうとした。だが、それは見えない力により弾かれてしまいそのまま地面に叩きつけられた。そしてその目の前でかなたの居たと思われる発光体は遥か宇宙へ飛び立っていった

「かなた・・・うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

そうじろうは夜の誰も居ない病院の庭で叫んだ。とても大きく、とても切なく

＊＊＊

此処はロンド・ベル隊の戦艦内、今場所は此処Ｌ５宙域に来ていた
それを窓越しにこなたとそうじろうは見ていた

「此処でお父さんとお母さんは出会ったんだね」
「そうさ、そして・・・此処にかなたは居る」
「うん、絶対に迎えに行こうね」
「あぁ、勿論だ！」

こなたとそうじろうはお互いに手の甲を軽くぶつけあってそう言った

あとがき

今回は自分が書いてる「スーパーロボット大戦ＬＩＮＫ」で何時かやるであろうシーンを書いてみました
はい、完全なるネタバレです。ですので先が知りたい人はオススメしません
あくまで作者が書きたいから書いただけですので
ではでは

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4228q/

出会い

2011年10月7日03時14分発行